大学1年生になった悠真は春休みを利用して、去年の修学旅行で泊まった山間の小さな集落へ再び戻ってきた。木々の匂いと土の香りが漂う山道を歩き、民泊の古びた玄関をくぐった瞬間、奥から軽やかな足音が近づいてきた。「悠真……本当に来ちゃったんだ。ふふふ、変態くん」と中学1年生の凛がにこりと悪戯っぽい笑みを浮かべて姿を現した。短い黒髪が少し汗で額に張りつき、小麦色に日焼けした幼い体はTシャツと短パンというラフな格好で、胸は完全に平らでほとんど膨らみのない小さな尻が短パンに包まれている。去年の修学旅行の夜、他の男子生徒たちがインフルエンザで次々とダウンしたおかげで、悠真だけがこの家に泊まることになった。あのとき、まだ小学6年生だった凛が恥ずかしそうにしながらも好奇心たっぷりに悠真のチンポを小さな手でコキコキとしてくれた甘く背徳的な記憶が、今も鮮やかに蘇る。凛は悠真の顔を見るなり、瞳を輝かせて小さな体をぴょんと跳ねさせた。「悠真、来てくれて嬉しい……去年からずっと、悠真のことだけ考えてたよ。会いたくて会いたくて、毎日山仕事しながら待ってたんだから♡」と、幼い声で素直に気持ちを伝えてきた。

凛は悠真に近づき、汗で湿った幼い体をぎゅっと押しつけてきた。山の

土と一日中動き回った汗が混ざり合った、甘くしょっぱい日焼け臭がふわりと漂う。鉄のような野性的なニュアンスと、子供らしい甘酸っぱさが絡み合った独特の香りだった。「今日も畑仕事と山道を歩き回ってたから、汗くさくてたまらないよ……。ふふ、悠真、風呂、入らないでほしいんでしょ？　凛、悠真のためにずっと臭いままで待ってたよ。大好きだから、なんでもしてあげる♡」悠真がこくりと頷くと、凛は目を細めて嬉しそうににやりと笑った。中1の無邪気な顔に、ど変態な笑みが不釣り合いなほど妖しく輝くが、その奥には悠真への純粋な大好きという想いが溢れていた。「いいよ。山奥で育ったど変態中学生が、5日間ずっと臭いままにしてあげる♡　お風呂禁止ね。汗も、土の臭いも、全部溜め込んで……悠真が大好きな臭いにしてあげるから。凛、悠真にいっぱい気持ちよくなってほしいんだもん♡」。

悠真は興奮を抑えきれずに言った。「凛……本当に臭いままでいいのか？　俺、去年のことが忘れられなくて……また凛の臭いに溺れたいんだ」。

その夜、民泊の離れの部屋で二人は再会を祝った。凛はTシャツをゆっ

くりと脱ぎ捨て、平らな胸を晒しながら、汗だくの脇を悠真の顔にぐいっと押しつけてきた。「ほら、嗅げよ変態くん。山で育った幼い汗、しょっぱくてエロいでしょ？　一日中動き回って、脇も首筋もびしょびしょだよ……大学生なのに、こんな中1の臭いに興奮してるなんて、ほんと最低♡　でも……悠真が喜んでくれるなら、凛、嬉しいよ……あっ……んっ……」。臭いの特徴は山土と日焼け汗が混ざった鉄っぽく甘酸っぱい野性的な香りで、子供の体臭に山の湿気と日焼けした肌の独特の甘さが加わり鼻の奥をくすぐるような濃厚さだった。悠真が夢中で鼻を押しつけ深く深呼吸していると、凛は小さな手で悠真の頭を優しく押さえつけながら言葉責めを始めたが、声には甘い愛情が混じっていた。「ふふ、鼻を突っ込んでクンクン嗅いでる顔、最高に変態じゃん。去年はただ小さな手でコキコキしてあげただけなのに、今年は大学生なのにまた来て、もっと臭い中1に溺れたいんだ？　もうチンポ、ビンビンに硬くなって、汁まで垂らしてるよ♡　年齢差なんて気にしない変態ロリコンくん……でも、凛は悠真のこと大好きだから、こんな変態な悠真も全部受け止めてあげるね♡」。

悠真は息を荒げながら答えた。「凛の臭い……最高だよ。去年よりずっ

と濃くて、たまらない……もっと嗅がせて」。

その夜、二人は何度もディープキスを交わした。凛は小さな舌を悠真の口内に深く差し入れ、ねっとりと絡めながら甘く喘いだ。「んっ……ちゅっ……悠真、大好き……もっと舌、絡めて……はぁんっ♡」。